

# 富山地域の縄文遺跡⑤ 豊田大塚・中吉原遺跡

## とよたおおつか なかよしわら 豊田大塚・中吉原遺跡の概要

**立地環境** 本遺跡は富山市北部、市街地から北北東約4kmに位置します。西方約2kmには神通川が、東方約3.4kmには常願寺川が北に流れています。両河川による複合扇状地の形成過程で多くの自然堤防が発達し、そこに多くの遺跡が営まれました。

本遺跡が所在する自然堤防は標高約8~10mです。南東には常願寺川の伏流水が湧き出す「フゴ」と呼ばれる湿地帯が広がり、現在もその名を冠した地名が残っています（上富居・中富居・下富居）。

**本遺跡の主な時代** 発掘調査では、縄文時代晩期（約2,700年前）、弥生時代終末期~古墳時代前期（約1,800年前~約1,700年前）、平安時代（約1,150年前）、鎌倉時代（約750年前）の人々の活動痕跡が確認されています。人々の営みは時代を問わず、本遺跡の北東部分にあった沼とともにありました。

**古墳の出現と拠点集落** 弥生時代終末期~古墳時代前期には沼べりで大量の土器を用いたマツリが行われ、土器は沼に捨てられていました。沼べりの自然堤防では同時期の建物などが確認されています。本遺跡の北西120mほどには、古墳時代前期の方墳（一辺22m）のちょうちょう塚が所在します。神通川・常願寺川による複合扇状地において、本遺跡はこの時期の拠点集落でした。社会が成熟していたことで、本地域にも県内最古級の古墳が築かれたのです。

**郡役所の祭祀の場** 8世紀初頭に完成した「大宝令」の神祇令には、律令祭祀（国家祭祀）が規定されています。天皇以下の人々が身体の穢れを他のものへと移して身を清める祭祀に、人形・布類・米・酒・稻・海産物・土製や木製の容器・馬などを使用することが『延喜式』（927年完成）に記載されています。



遺跡と発掘調査区の位置（網は古墳時代の沼）

す。律令祭祀は奈良～平安時代に都（平城京・長岡京・平安京など）で盛んに行われ、各地に赴任した役人たちによって地方の役所にも伝えられました。

平安時代の本遺跡では、沼べりで人面墨書土器や人形、斎串を用いた祭祀が行われました。用いられた品々は付近の溝に流されました。本遺跡の北方約1.2km 地点には郡役所（新川郡家）と推定されている米田大覚遺跡があり、本遺跡は新川郡家の祭祀の場と考えられています。

## 縄文時代晩期の豊田大塚・中吉原遺跡

**海岸線の推移と気候** 富山湾では、富山（四方・神通川河口）・魚津・入善などで埋没林（現在は海面下に沈んだ樹根群）が確認されています。四方埋没林の年代から、縄文時代晩期後半頃には海岸線が現在より200m以上沖合にあったことがわかっています。富山湾の海面は、約7,000～6,500年前は現在と同様でしたが、温暖化した約6,500～4,000年前は現在より4～5mほど高く、約3,000～1,500年前（縄文時代晩期～古墳時代中期）は現在より低い（最大で現在より2mほど）状況にありました（藤井1992）。本遺跡は、寒冷化に伴って海岸線が後退したことで活動の場を広げた縄文人が残した遺跡の一つです。

**呪術（マツリ）の場としての沼べり** 本遺跡では、御物石器（※1・※2）・石刀・土偶など、縄文時代晩期の呪具が沼べりから見つかりました。石刀と土偶は近くから出土し、いずれも意図的に壊されていました。他の呪具も破損していました。土偶の顔は平坦で、両耳と額に穴が3ヶ所あけられています。

史跡北代遺跡の北東約500mに位置する長岡八町遺跡では、類似した土偶を含む呪具が谷部から多量に出土しました。土偶は、両耳の穴と紐の線刻から、仮面を付けて神や精霊に化身した呪術者を模したものと考えられています。

本遺跡出土土偶の3ヶ所の穴も、仮面の紐穴と考えられます。呉羽丘陵北端から神通川を越えて約4km 東北東に位置する本遺跡でも同じような呪具を用いて呪術が行われたのです。縄文人は、寒冷化によってもたらされた人口減少などの困難を、仮面を用いた新たな呪術で乗り越えようとしたのです。



土偶（仮面を付けた呪術者）

※1 石川県穴水町比良遺跡出土品2点が明治天皇の北陸巡幸の際に献上され、帝室御物になったことが名称の由来です。飛騨や美濃、北陸を中心に分布します。

※2 本例は、富山県で最も海浜部に位置する縄文遺跡からの出土品です。

参考文献 富山市教育委員会 1998 『富山市豊田大塚遺跡発掘調査概要』  
富山市教育委員会 2003 『富山市長岡八町遺跡発掘調査報告書』  
富山市教育委員会 2013 『富山市豊田大塚・中吉原遺跡発掘調査報告書』  
藤井昭二 1992 「海底林と海水準変動」『アーバンクボタ』No.31